

1 日本の学校建築における教職員スペース

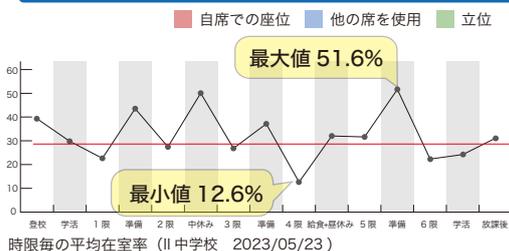
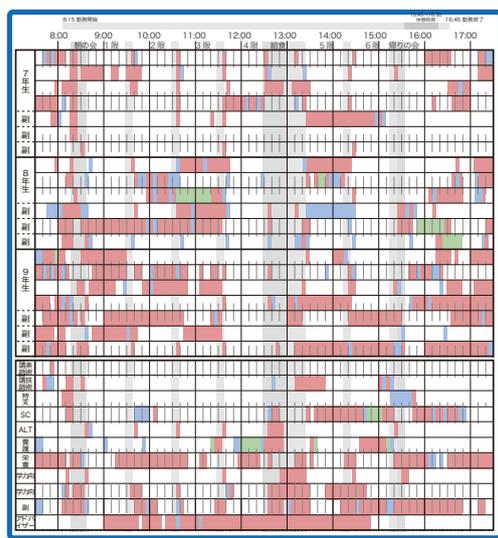
学校建築の計画・設計において、最も重要と考えられるのは、いうまでもなく子どもたちの学びを実現する学習空間である。中でも多くの時間を子どもたちが過ごす教室とその周りの空間構成の在り方については、戦後多くの研究者や建築家たちが模索し提案し続けてきた。しかしながら教職員スペースについては、学校においてはどちらかというと利用者というよりスタッフのスペースとして考えられてきた。「職員室は校庭と校門の見える位置」、「可能な限り接地階に」、など定石とされてきた配慮事項はあるが、設計提案において優先度高く扱われる室ではなかったといえるだろう。また、研究対象としても、個人情報の問題などから調査研究のハードルも高く、多くの研究がなされてきたとはいえず、戦後学習空間においてオープンスペースをはじめとするさまざまな議論されてきたように、教職員スペースについて革新的な提案や議論がされてきたとはいえない。そのため戦後または明治28年の「学校建築図説明及設計大要」から、教職員スペースは大きな変化なくつくられてきた執務空間といえる。

2 近年の学校における教職員の働き方

30年ほど国内の公立学校を研究対象としてきた著者から見ても、確実に学校教職員の方々の多忙感は以前に比して増している。著者の研究目的は、子どもたちの育ちと学びの場としての学習環境の在り方を検討し実現することであるが、それを実現するために不可欠な教職員の方々の力と時間を割くことが難しい現実を目の当たりにしてきた。そこで板橋区教育委員会の協力を得て、板橋区内小中学校を対象とした職員室の利用実態調査を開始した。2022年には小学校3校を、2023年には中学校2校を対象として7時30分〜17時30分10時間の観察調査を行った結果、小学校と中学校ではその利用実態に大きな違いがあることを数値的に示すことができた。図1はSR小学校、図2はII中学校の職員室における教員の在席率を示しており、その下の折れ線グラフは各時限の平均在席率を示している。これより学級担任制の小学校と教科担任制の中

働き方の意識を変える 教職員スペースの改革

千葉工業大学創造工学部 デザイン科学科 教授 倉斗 綾子



【図版引用元】

千葉工業大学大学院デザイン科学専攻科 荒木満由子修士学位論文
「働く環境としてみた学校教職員室に関する研究―公立小中学校を対象とした調査と実践―」

学校では、職員室の使われ方が大きく異なることを明らかにすることができた。さらに職員室の1日の在席率は、調査対象校の平均値で小学校

で2割、中学校で3割程度であることがわかった。

仕事の多くをPCを使って行い、連絡手段も個々の携帯電話で済むようになった今日、多くの民間企業では業務効率、従業員のWell-Beingの向上を求めて多様な働き方を模索する動きがある。しかし教職員室はこれまで長く、役所をはじめとする従来の事務空間と同様に、管理職席を全体を見通せる位置に置いた島型配置で計画されてきており、学校建築の設計上でも小学校と中学校で教職員室を大きく異なる計画とすることは少なかつた。業務用PCや授業で使用する授業用タブレットは十分に普及したといえるが、多くの自治体で、校務分掌や成績管理を行う業務用PCと授業用タブレットの間の情報のやり取りが整備されていないなど、民間企業の働き方に比べ業務効率が高いとはいえない状況である。

3 教職員による職員室改革

板橋区では学校改築や新築の際に、①将来的な教職員・支援員などの人員増加への対応、②ペーパーレス化による重要書類の紛失等防止、③限られた面積を有効に使用して教職員の共用空間、リフレッシュ空間を確保する、等の方針を打ち出し、教職員室のフリーアドレス化の検討を始めている。2020年9月に改築校舎が竣工した板橋区立IJ小学校でも、この方針に沿ってフリーアドレススタイルの仕器が設置され、開校当初は1つのテーブルを学年毎に使用し、その位置を隔週でローテーションする形で固定席化させない運用がなされた。しかし、年々教職員数も増え、席替えの煩わしさなども感じ始めていたことから、開校から2年後に著者らの研究室の学生も交えた教職員室に関するワークショップを実施し、前に示した職員室の在室率のデータなどを踏まえ、改めて教職員室における働き方を考える機会を持った。参加した教員4グループがそれぞれに新たな職員室の使い方を提案したところ、全てのグループから共通して、①教職員間のコミュニケーションのとり易さ、②ONとOFFの区別ができること、③周りを気にせず電話が使える場所、④完全フリーアドレス型での運用が示された。完全フリーアドレスへの希望が出たことは著者にとっても意外であったが、全員が職員室にいることが

〈連載テーマ①〉

【魅力ある学校づくり～組織・運営～】

ほとんどないという実態を踏まえれば手狭な固定席を設けるよりも臨機応変に行う作業に応じて場所を選べた方が良く、一人でやりたいときは教室で行えばいい、等の理由であった。

そうして2023年3月より完全フリーアドレススタイルでの運用が開始されているが、訪れる度に使い勝手の良い形へとリニューアルが繰り返されており、数ヶ月後には「お菓子コーナー」や教員間で読んだ本を共有する「オススめの図書コーナー」なども誕生していた。さらにそこから1年後の2024年2月には、次年度の異動や人員増加に向けて新たな配置案が教員グループから提示され、ソファ席や一人で集中したい人用の席等も登場した。利用状況についてお聞きすると、年度初めはメンバーも入れ替わるため、学年と顔や名前を覚えるまでの間、学年毎の固定席で過ごし、6月頃には自然とフリーアドレス的な利用に移行している様子や、学年での行事や打合せが多い6年生などは学年で席を固定するグループアドレス的な利用をしているなど、その時期、学年、状況に合わせて臨機応変に使用しているとのことであった。

こうした事例研究から、教職員室に限らず「学校」という場合は、明治以降長く続いてきた「従来の学校」イメージに非常に強く捕らわれており、その場を今日の自分自身の学び方、働き方に合わせて調整して良いという判断が及びにくい場であることがわかった。今回の事例では、職員室改革のきっかけとなったワークショップへの学生参加や職員室在室率のデータにより固定概念を壊せたこと、そして実際に全く新しい配置にしてみたことで、次々とアイデアが湧いてくるのが教員等に実感されていた。

日々の業務に多忙を極める教職員だが、自分たちの働く環境としての学校、教職員室を「変えていい」と思わせる、つまりマインドセットを変えるきっかけさえあれば、自室の様様替えを楽しみながらるように働く環境は良くなる。そして、そこにちよつとした外の風（外部の人）が吹くことが、そのきっかけづくりの後押しをする。こうした経験からも、改めて今「学校」という場に外の力が必要とされていることを実感している。